

「明拓九成宮醴泉銘·龔心釗旧藏本」

明初拓九成宮醴泉銘
丁卯仲秋
齊民仁兄屬孝子

九成宮醴泉銘

唐歐陽詢書

九成宮醴泉銘
明溫伯堅中丞藏本
齊民仁兄屬孝子

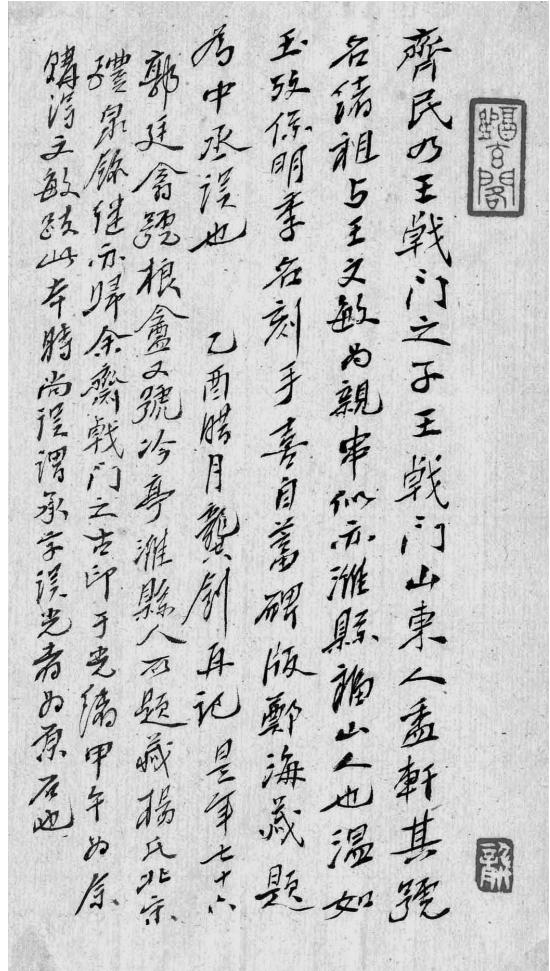


丁卯仲秋
齊民仁兄屬孝子

⑤



④



歐陽詢の楷書の名品「九成宮醴泉銘」の宋拓本は、大変珍しいものである。ここに示したのは、明代初期の拓本とされるものです。宋拓と比較すると、この頃でも碑面の文字には、字画の変化が見られ、宋拓本に見られるような充実した点画ではなく、やややせ衰えた趣を示しています（図⑤）。それでも明代初期の拓本となるとそれほど多くはありません。この本は、明代の装幀をそのままに伝える表紙を残している。明人・温如玉の個性的な隸書の「九成宮醴泉銘」の題簽（図①）が表紙の中央に付されています。この帖を所蔵した王齊民（有名な収蔵家・王載門の子）のために清末民國期の金石名家一人が、題簽を書いている。一は前にも紹介した羅振玉である。細い鋭い小さい文字で「明初拓九成宮醴泉銘 丁卯仲秋 齊民世大兄屬 羅振玉題」（図③）と。もう一人は、政治家であり金石家として独特的の書風を打ち立てた鄭孝胥（1860～1938、字は蘇龜、海藏と号す。清末の改革派政治家、満洲國國務總理）の楷書（図②）である。羅振玉に比べて、大変大きく伸びやかな楷書である。また巻末には、旧蔵者・龔心劍（1870～1949、字は懷希、仲勉と号す。清末著名な外交官、金石家）の長文の跋文が、小さな独特の味わいある書風で書かれている（図④）。図版に示したのは、龔心劍の前の所蔵者に関する伝記を書いた部分である。行書を交えた伸びやかな見事な細字である。

この欄に關するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りいただければ幸いです。
伊藤 滋 メールアドレス
mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

書道芸術院 平成の群像 (2013)

「地底のマグマが創る奇跡の像は神の戯れか」



畠 中 弄 石

「表現力を豊かに」

平成23年3月の東日本大震災の報道

は、特に書道芸術院に籍を置く我々に衝撃を与えた。自然の力の恐ろしさだけが頭の中を占領した。あれから二年、原発事故の記事が真実を伝え始めた。

作家としてこの震災を描くとき、現代詩文書部の小生は、自分の言葉で作品を捉えることが出来る。叙情的ではなく、まさに意図的に直線的な強いつまみで、仮名も漢字に合わせて、紙面を占有する如く強い筆致で。

より「思い(想い)」を書に表現するためには作家は語彙力を持たなければならぬ。素材を自分の言葉で表現できるのが理想である。文人の書に魅力があるのは自分の言葉で書いているからである。

言葉(詩)に素材を得ながらも、時として自分の言葉で作品を仕上げると、的確な語彙力の不足を痛感するのである。

語彙力の不足を補うため(気分転換のため?)にときどき、京都・奈良など自然の懷に入っている美しいものを見て感じる力を養うように努め、言葉を探っている。感性を高め、的確な詩的表現を求めることが造形力を鍛えることにもつながるよう思う。

古典の臨書、学習の必要性へとつながっていく。幅広い表現力を身につけるためには古典の臨書を深めることに尽きる。

豊かな感性を持ち、かつ表現力を身につけることが書きぶりの自在さにつながっていく。

自在な書きぶりを助けるのに、墨の濃淡、筆の柔剛の使い分けがある。淡墨には、長文の時は木筆が合うとか、短文には短い羊毛筆とか。筆の使い分けは素材に応じての工夫が作家として楽しみの一つになる。

始めたる者ごとに、素材から表現まで新鮮さをなくさず取り組んでいたいと思うこのごろです。

作品写真的素材は平成23年の震災時に作った拙文です。

「地底のマグマが創る奇跡の像は神の戯れか」

書のひろば

理事長 辻 元 大 雲

第65回毎日書道展東北仙台展 記念役員巡回青森展 盛大に開催

国立新美術館、東京都美術館での東京展を終え、全国10か所での地方展が展開中である。8月の京都展を皮切りに四国愛媛展、中国広島展、北陸富山展と続き9月12日からは東北仙台展が大震災後3度目の開催となった。16日には会場での作品解説及び席上揮毫を中村雲龍監事と共に担当、出品者の集いも300名を超す盛況で盛り上がった。藤大峰実行委員長はか役員のご努力が報われた会であった。

65回記念の役員巡回展も3月の静岡展、神奈川展、兵庫豊岡展、8月には前橋展が下谷洋子実行委員長のもと盛大に開催されたことは既報の通り。9月21日からは坂本素雪実行委員長のもと青森展が青森県立美術館で開催された。宮城・岩手・青森3県の毎日展関係者の出品と高校生の優秀作品の併催もあり多彩であった。21日にはオーピングのオープカットに続き作品解説を大雲が担当した。22日には船本芳雲理事による講演会と出品者の集いが盛大に開催された。今後地方展が北海



席上揮毫の様子

書道芸術院九州支局展行橋で

本院13の総支局の中で唯一毎年開催されている九州支局展が本年は会場を福岡県行橋市コスメイト行橋にて9月20日から23日まで開催され、21日恩地顧問はじめ来賓をお招きして祝賀懇親会が京都ホテルにて開催され盛会であった。22日前作品解説午後には席上揮毫を大雲担当。これまで大分での開催が主であったが和光塾の高田幽玄会長

の陣頭指揮のもと立派な運営をされた。来年もという声が多く寄せられおり期待したい。牧・高田両氏の幅5m余の大作が注目を集めた。

全日本書道連盟理事会開催

9月12日、新体制になって初めて初めての理事会が上野精養軒にて開催され諸議案が審議された。

- 書写・書道教育に関する要望書提出
- 全国書美術振興会と全書連が幹事団体となり全書研、全高書研、全国大学書写書道教育学会など6団体のほか、毎日書道会、読完書法会など賛助6団体が共同して書写書道教育の充実、発展を目指して文部科学大臣、文化庁長官さらに新体制が発足した中央教育審議会会长へ要望書を提出した。今後より積極的に運動を推進していくことで合意。全書連、書美振連が中心的に担当することになっている。

・ 日中代表作家展北京展開催へ

延び延びになっていた北京展が本年10月25日から11月3日まで中国国家博物館で開催されることが決まった。連盟から清水透石副理事長、田中節山事務局長、鹿倉碩齋事務局員ほかが代表として訪問することになった。日中代表作家各41名が出品、全書連は顧問から理事監事以上含め41人が出品している。

- 平成25年度書道講演会

恒例の書道講演会が11月に日展開催中に開かれる。講師は美術評論家菅原教夫氏の予定。日程などは未定。

- 平成25年度助け合い運動

例年通り維持及び賛助団体、役員を中心募金活動を行う。参与以上は1口1万円、評議員は5000円。日本赤十字社を中心寄託する。

- その他 役員選考方法の明文化、助成事業の認可（今回2件認可）、高野山開創1200年献書事業の推進など。
- 連盟新会員推薦 4月以降118名加入。

各地で個展など盛況に開催

・ 水川舟芳個展 每日展漢字部一瀾会長の大個展。9月3日～8日まで東京セントラル美術館に大作14点で喜寿を寿ぐ活気あふれる書展であった。

・ 関口春芳個展 9月10日～15日、同じく東京セントラル美術館にて、同漢字部理事創元書道会副理事長の個展はやはり大作中心でこちらも喜寿を迎えて女性らしい細やかな雰囲気とダイナミックな気迫にとんでも充実作で圧倒された。

・ 千葉蒼玄 「鎮魂と復活PART II」 我が書道芸術院の事務局長が東日本大震災後シリーズで展開している個展の集大成ともいいうべき大個展を、9月12日～17日、仙台メディアテーク1階ホールにて開催。メインの本年年頭、東京都美術館の企画展「公募展の今」への出品作を中心に大作を展開。大きな反響を呼び、6000名近い入場者で盛況。

漢字(一)

崎井恵風

かな(一)

田子白嶺

大作への挑戦 「新樹」

2度目の原稿依頼に当惑しました。前回の発表から10年になります。毎日展大字書部で会員賞を受賞したのもこの時期でした。この節目の10年を振り返る機会を与えていただきたと思い、ペンを取りました。

会員賞の重みからなかなか脱する事ができないまま5年が過ぎた頃に、会で大作発表をする企画がありました。それまでの私は体力に自信なく、太くて重い筆を避けながら、2m×5mの大きな紙面にはその太筆を2～3本束ねて書かない迫力不足になります。縮小紙に習作をくり返し、いざ本番になると筆を持つだけで体が付いていかず、足が縛れる始末。自ずと書く枚数も限られます。書く広い場所も必要です。出品者一同が会する研究会が2回設けられました。その2回目の会で書いた1枚目の作品です。見守る仲間のパワーを頂いて書けたものです。この体当たりの作品制作で賞の重圧からも解放され、新たな気持で書と向き会える好機を得ました。



崎井恵風書

21世紀の書

—私の主張—

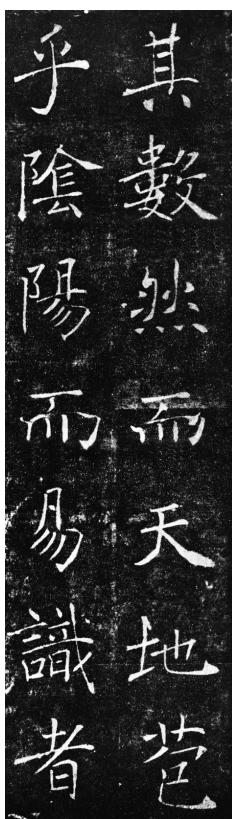
学書の意義について

人間は感覚器官によって色々感じますが、感覚器官からの刺激は直接心に作用するのではなく、まず「眞我」と言われる脳の受容器官で受けられ、この後に眞我は発揚し心に指令を送る。これを受けた心は指令された通りの心になる、と考えられています。同じ物を見ても人によって感じ方が違うのは、この指令のあり方が人によって違つからです。人間が心に抱くすべての思想、感情、感覚、等は皆この指令によって成されるので、人の心は指令のあり方でどのようにでもなつてしまふのです。この眞我を正しく鍛えることを精神修養

と言い、古来人間形成の一環とされてきました。学書で「感覚を磨く」というのも、実は心に指令を送る眞我を鍛えることなのです。名筆を見て感動し得なかつた者が、学書鍛練の後感動するようになつたとすれば、これは鍛えられた眞我が新しい指令を送り、感覚を変えたのです。その分精神的豊かな学書はこうした事のくり返しで、鍛練による感覚、感性の進化向上をめざすこと、これが感覚面の学書のすべてで、ここに意義があると思うのです。

初学の頃、雁塔聖教序が嫌いで、鍛練による感覚、感性の進化向上をめざすこと、これが感覚面の学書のすべてで、ここに意義があると思うのです。

(次号続く)



褚遂良 雁塔聖教序（唐・六五三年）

第49回 書道芸術院単位認定講習会（東京）

会場＝熱海 金城館

会期＝平成25年8月17日（土）～18日（日）

主管 東京総局長 滝 春芳

今年は異常な暑さで、キャンセルが多く、対応に追われた。

総局の係は16日午後1時に集合し、書類の準備、床のビニール張り等も、3時のチェックイン迄に、間に合う事が出来た。

17日（土）、司会者・佐藤希雲先生の「皆さん、お集まりのようなので定期より早く始めます」との開式の言葉に始まり、辻元理事長挨拶に引き続き、一課目め、「刻字」の講習が始まり、「表札を作る」で書稿を元に、清水先生の熱心なご指導と、時折、緊張をほぐすユーモアに、会場は、笑顔と、熱気で包まれた。助講師の小林先生、市川先生のご協力をえて定期に終ることが出来た。実技を入れての、80分では少々無理のように思われる。

開講式



刻字 表札に挑む



刻字 清水翠径先生



2013.08.17

続いて中庭での記念写真、昼食後12時40分から「かな」講習が始まった。
秋の昇級試験に臨んでのテーマ「半折



実技風景



かな 石井明子先生

に書く」で石井先生の「目が高くなれば、必ず字がうまくなります」などとの講義に、皆真剣に聞き入っていた。皆夢中で取り組んでいるなか、平川先生のアドバイスもくわわり、皆時間に追わされて大変のようだった。

次の「漢字」は、名越先生の「起筆」は大胆に、收筆は慎重に」との講義に、皆心して、筆先を見ながら熱心に臨んでいた。岩垣先生を始め、他の先生方もアドバイスをなさっておられる姿が見受けられた。

「現代詩文書」。畠中先生の「かなを書き、漢字を書いて仕上げにもつていただき、びっくりするような作品を書いて下さい」とのお言葉に皆ブレッシャーを感じながらも頑張っていた。午後からの三課目めであり、なんとなく疲労の色が、表われだしたようだ。



漢字 名越蒼竹先生



現代詩文書 畠中弄石先生



実技風景

7時から懇親会を楽しみに、やつと荷物を持ってお部屋に散っていました。

懇親会は和やかな雰囲気の中、会員同士の親交を深めた様だ。その上思い掛けず、多数の先生方から作品、理事



前衛書 千葉蒼玄先生



書写 広瀬舟雲先生

最後の「前衛書」は千葉先生がスライドで分りやすく説明して下さり、そ

の後、高橋先生、千葉先生の超長峰の見事な筆遣いに、皆息をのんで見入っていた。「雨」の課題に、それぞれ取り組み、香川先生、村野先生方の助言で楽しそうに書いていた。

朝10時から6時半まで、本当にお疲れさまでした。受講生の顔は、疲れながらも生き生きとしている感が見受けられました。

朝10時から6時半まで、本当に疲れました。受講生の顔は、疲れながらも生き生きとしている感が見受けられました。

18日は9時から「書写」。廣瀬先生が「目からウロコ」の話をユーモアを交え楽しく、分かりやすく、エンピツの持ち方、姿勢にいたる迄、注意なされ、小学生気分を味わいながら忙しくメモを取り、「全員提出の事」との声に、あわてて書き上げ提出。

これで実技は終り、ほっとした感じであった。

長の中国土産までいただき、大勢の参加者に当たり盛り上がった。

二回目のカラオケも、大勢の方々が楽しめた。

「原拓書道史」の時には、貴重な原拓を会場の周りに並べ、皆は思い思いにすわり、映像を見ながらの種谷先生の講義で是非中国に行つて見たいとの思いをはせたことでしょう。



原拓書道史 種谷萬城先生



院史 辻元大雲先生

認定証の入った袋と、刻字の先生方のご苦労で、出来上がった表札に、目を見はり大切に持ち帰りました。
本部の先生始め、相談役の先生、講師、助講師の先生方には、遠い所までお出掛け下さり、ご支援いただき、良い講習会が出来ました事を感謝申し上げます。

第49回 書道芸術院単位認定講習会



◎1日目

【篆刻・刻字】 「表札を作る」

講 師 = 清水 翠径先生
助講師 = 小林 古徑先生
助講師 = 市川 公山先生

【かな】 「拡大臨書」

講 師 = 石井 明子先生
助講師 = 平川 峰子先生
【漢字】 「起筆・収筆を工夫して行草書を書こう」
講 師 = 名越 蒼竹先生
助講師 = 岩垣 若翠先生

【現代詩文書】

「豊かな表現力をつけるために」
講 師 = 畑中 弄石先生
助講師 = 上村 森芳先生

【前衛書】

「文字をつくろう」
講 師 = 千葉 蒼玄先生
助講師 = 高橋 小汀先生

◎2日目

【書写教育】

「最新の書写教科書の

「字形と考え方を学ぶ」

講 師 = 広瀬 舟雲先生
助講師 = 三浦 鄭街先生

【原拓書道史】

「山東省の書道遺跡」
講 師 = 種谷 萬城先生
助講師 = 大内 燐軒先生

講 師 = 辻元 大雲先生
助講師 = 前田 龍雲先生

2日間、七講義が無事終り、晴れで

講義内容と講師・助講師紹介

最後の「院史」は、芸術院の創立からのお話、歴代会長の方々や、現在の先生方の作品等のスライドを見ながらの講義を楽しまれた。

引き続き閉講式では辻元理事長が、2日間のまとめをして下さり、皆講習会での講義、実技を深く心に刻んだ事でしょう。

2日間、七講義が無事終り、晴れて

樂毅論（光明皇后）①

漢字研究部臨書課題

（半紙普通判・縦使用）左記の法帖より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可。

〈解説〉 この一巻は表紙題簽に「樂毅論 紫微中臺御書」（4頁）と墨書される。紫微中臺とは光明皇后の皇后職を改めた名前である。本紙は白麻紙三紙を縦いで本文を書し、さらに別に黄紙に「天平十六年十月三日

藤三娘（藤原不比等の第三女）と付記する。よって、天平十六年（七四四）、藤原不比等の第三女である光明皇后（七〇一～七六〇）の四十四歳の筆と判明する。

(編集部)

※落款を必ず入れる
署名、もしくは〇〇臨
(押印のみ也可)

夫求古賢之意宜以大者遠者先之必迂迴而難通然後已焉可也今樂氏之趣或者其未盡乎而多劣之是使前賢失指於將來不亦惜哉觀樂生遺燕惠王書其殆庶乎機合乎道以終始者與其喻昭王曰伊尹放

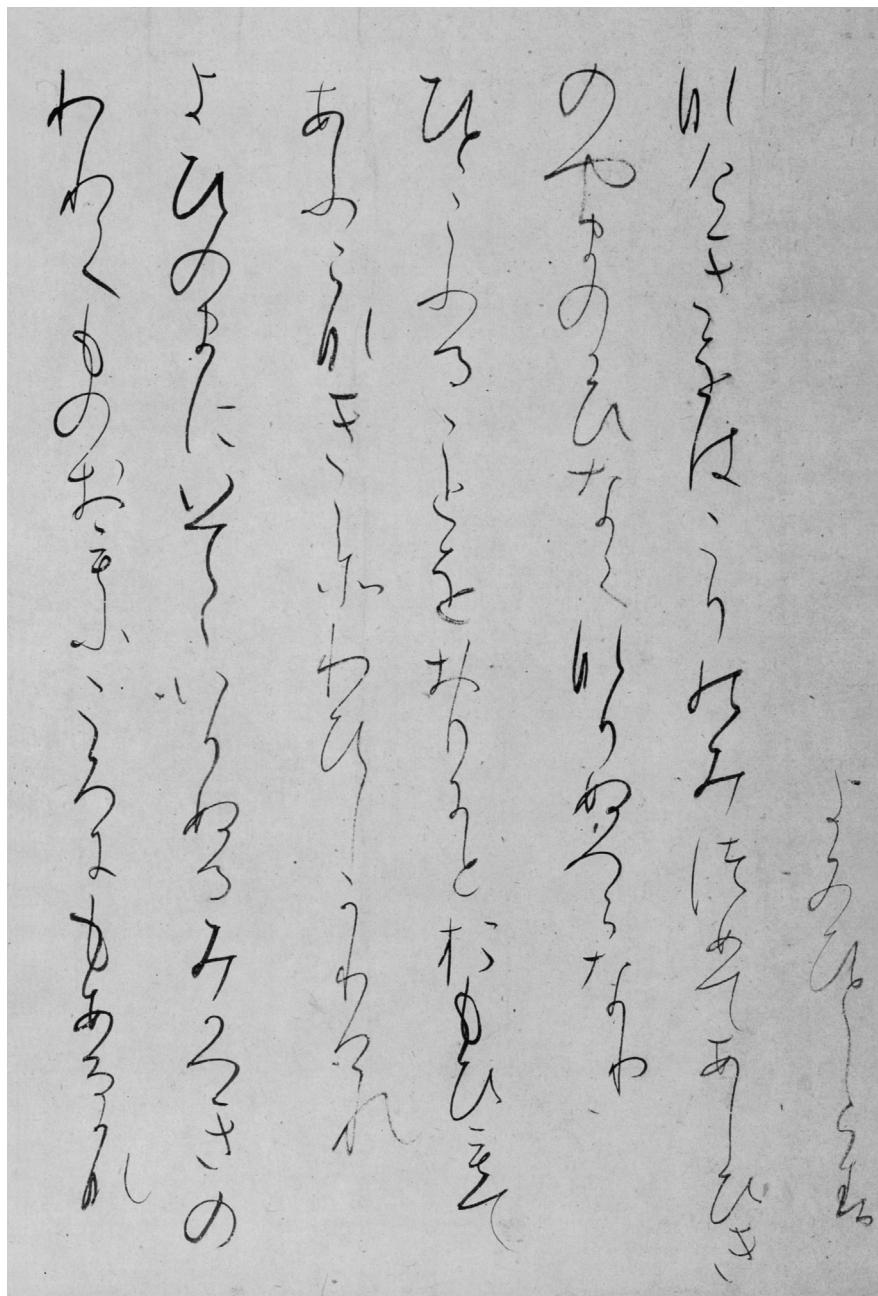
夫求古賢之意、宜下以大者遠者先之。必迂迴／而難通、然後已焉可也。今樂氏之趣、或者其未尽乎。而多劣之、是使前賢失指於将来。／不亦惜哉。觀下樂生遺燕惠王書、其殆庶乎／機合乎道、以終始者上与。其喻昭王曰、伊尹放

<よみ>

高野切第三種
(伝紀貫之)

①

よみびとしらす春
なげきをばこりのみつめてあしひき
のやまのかひなくなりぬべらなり
ひとこふることをおもにとおもひもて
あふごなきこそわびしかりけれ
よひのまにいでゝいりぬるみかづきの
われてものおもふころにあるかな



(70%縮小)

<解説>

日本風の書を示す和様の書のもっとも象徴的な書体は、優美な女手（平仮名）であろう。その最も完成された姿を示す遺品となると、何といっても「高野切」である。真名（漢字）を借りて日本語を表記した真仮名、そして万葉仮名から草仮名、女手へと段階を経る間に、多くの能書がより美しい字体や連続の追求を受けた結果である。

『古今和歌集』巻第九の巻頭の断簡（湯木美術館蔵）が高野山に伝来したことから、この一連の断簡を「高野切」と呼んでいる。すべてが紀貫之筆に伝称されるが、実際は百年あまり後の書写である。それも三人の能書による分担執筆で、その書風の違いにより、第一種から第三種までに分類されている。

この一巻（部分）は、第三種書風で、卷第十九・雑体を書写した断簡である。切れ味の鋭い筆線を駆使しながら、明るく流動美あふれた書風を展開する。洗練された張りのある線質は、筆の穂先まで細やかな神経を働かせた美しいものである。

尚、掲載部分は国立博物館「和様の書」にて展示されました。
(島谷弘幸著「書の美」より)

かな研究部臨書課題

- 競書作品は、左の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。
(全臨も可)
- 用紙は半紙普通判
(料紙可)
<たて長に使用>
別紙を裁断して貼付も可。
半懐紙は半紙サイズに切って使用のこと。

特別研究部臨書課題

- 毎日展公募サイズ以内・縦横自由
・左記の掲載以外も可

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
(押印のみも可)

習い方解説 (一)

大野祥雲

風調夜景清
(劉禹錫)
(風やわらぎて夜景は清し)

知の四万十市江川崎では、国内最高気温を記録。9月に入りやっとどこからか吹く風に秋の気配を感じます。

今日は基本点画に気を付けて、楷書を書きました。楷書といっても用筆法は多種多様。伸びやかに書いてみましょう。

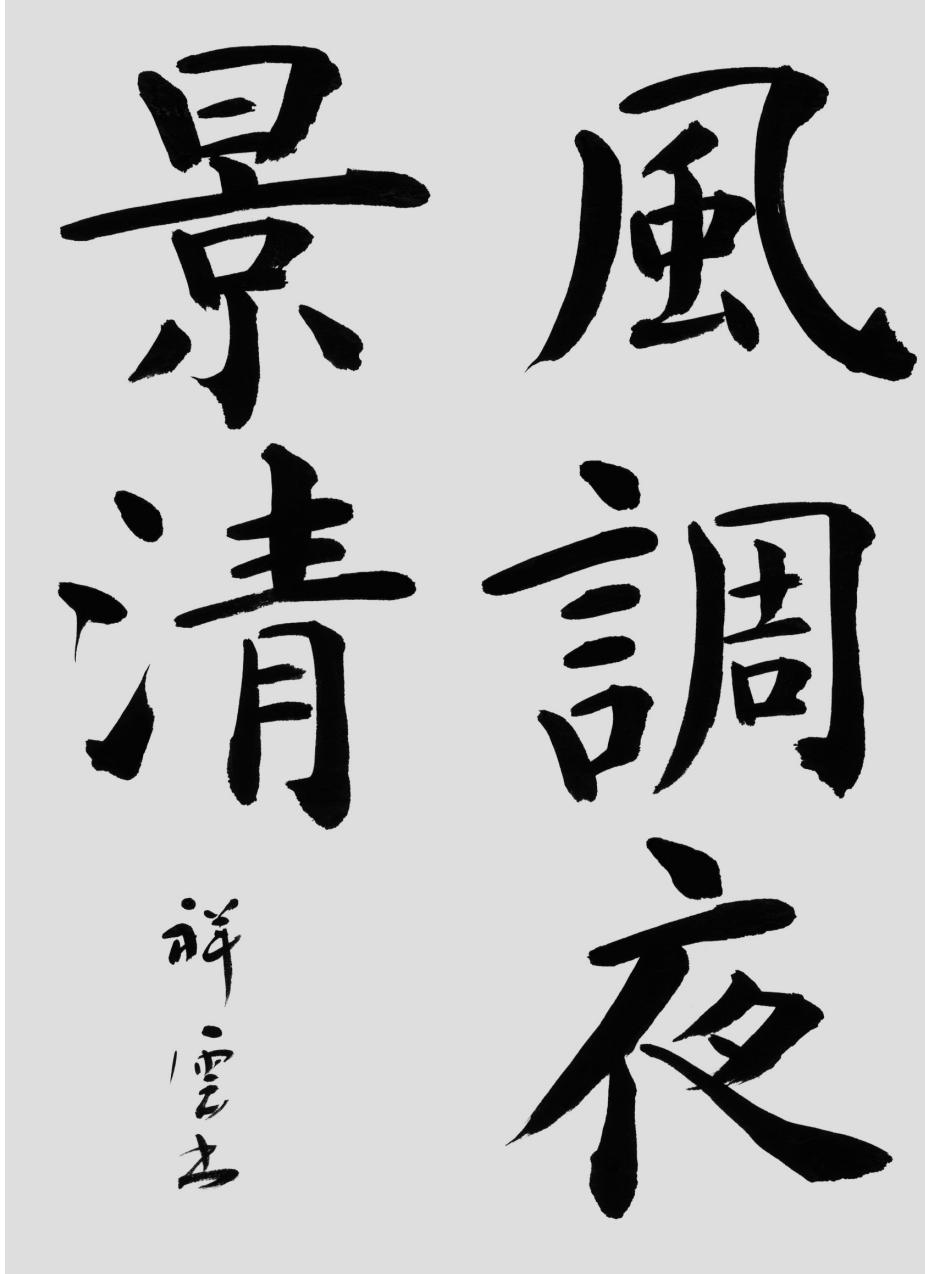
「風」構えを伸びやかに運筆。内部の虫は余白を考えながら書く。「調」言偏に対し、旁の内部には余白もあって大きく見える。偏と旁の結構からして、偏の二画目を少し長く。

「夜」第一画を点とし、次の横画は右上がりで短目。三画と最終画の払いを伸びやかに。 「景」日と京の会意文字。字形は左右対称。口の大小と六画目の横画に注目。

風調夜景清 よみ(風やわらぎて夜景は清し)

書体=自由

「清」狭い偏と旁の組み合わせに注意。少し横幅のある「シ」にしたい。



習い方解説（一）

名 越 蒼 竹

至 敬 無 文
(至敬は文無し)
(禮記)



今月から6ヶ月、秀級以下の部を担当します。楷書で4文字を書いて行きます。1回目は歐陽詢の書風を参考にしました。特徴は字形が背勢・縦長で、点画はキリッと引き締まって緊張感があります。

一般に、求心的で文字の手足が長い字を書くときは字間を広めにとらないと文字がぼやけてしまいます。手足の長さを見せたいのに余白を広めにとらなければならぬという二律背反をうまく処理するのが難しいところでしょう。小さい点画は力を抜きがちになるので、どの点画もしっかりと書きたいものです。

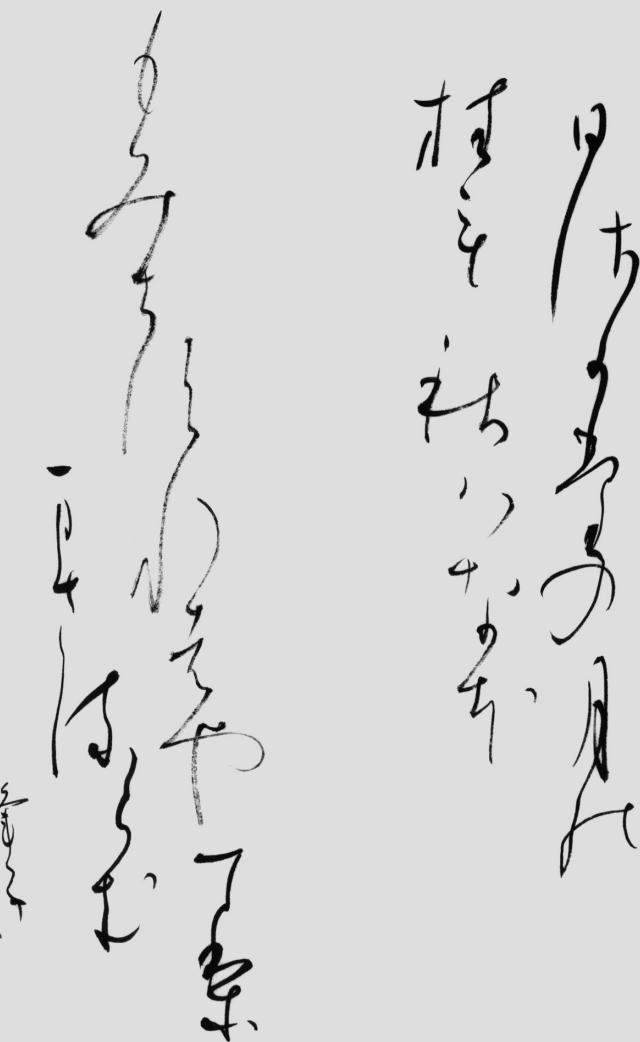
かな規定 初段以上【十一月十五日締めきり】用紙 半紙普通判（料紙可）

平川峰子選書

習い方解説（一）

平川峰子

ひまかた つき かつら
久方の月の桂も秋は猶
もみぢすればやてりまさるらむ
(古今和歌集 千生忠姿)



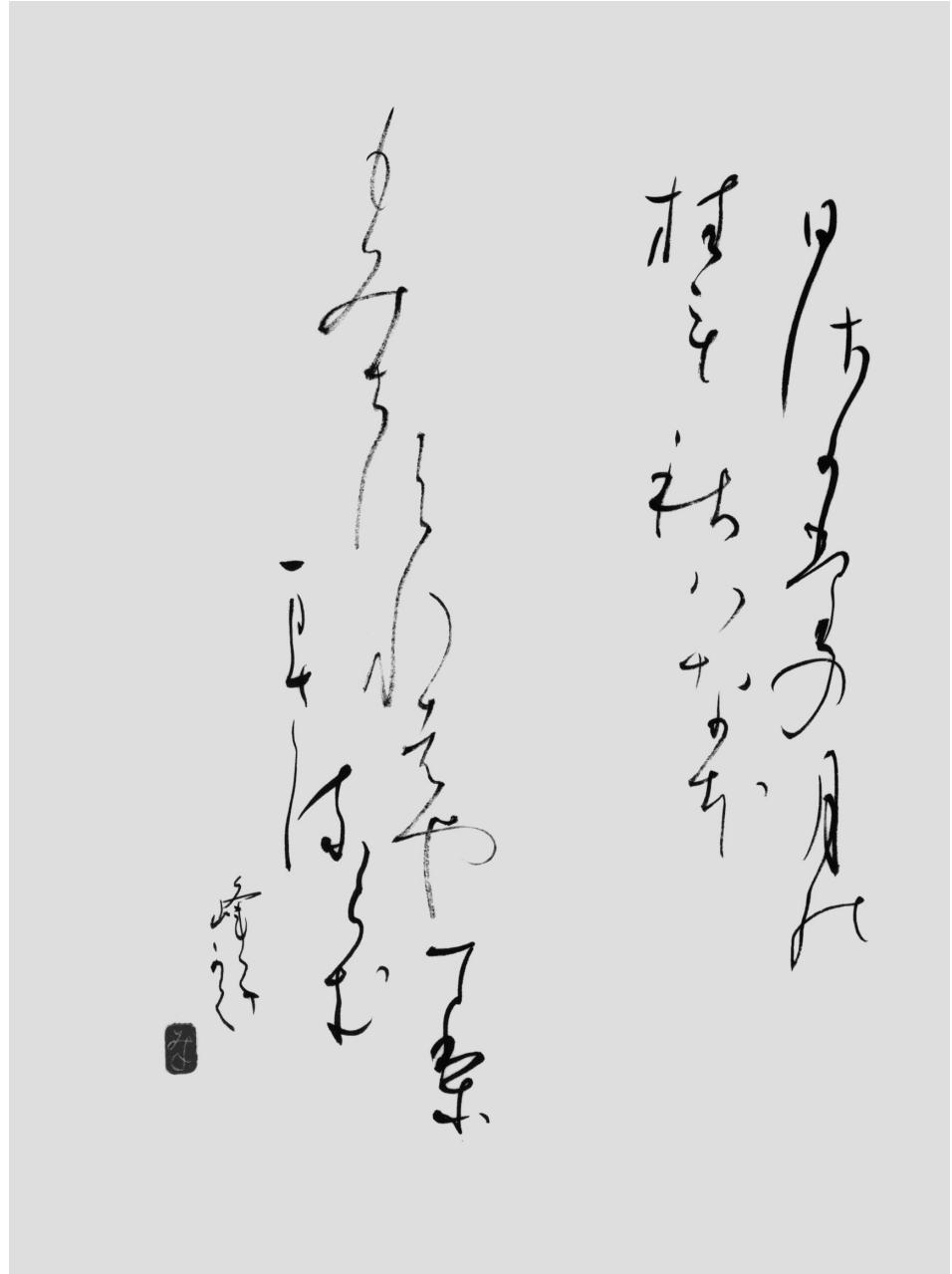
かなの美しさは、字と字を続けて書く連綿に負うところが多く、流動美が生命とも言えます。

半紙に和歌一首、俳句一句を創作する場合、少し筆管の上部を持ち、筆の可動範囲が大きくなるようにして、腕の構え方は、右腕を机につける提腕法、又は、右手の下に枕として左手を置く枕腕法が一般的ですが、連綿が長く続く場合は懸腕法が良いと思います。

筆の持ち方は、人さし指一本をかける単鈎法、人さし指と中指をかける双鈎法のどちらでも良いのですが、親指はできるだけ伸ばし指先が上方を向くような持ち方で、筆が紙に対して垂直になるよう心がけてください。又、不鮮明に見える字はその都度辞書を引いてください。

よみ方 ひ(日)さ(佐)か(可)た(堂)の月の(能)桂も(毛)秋は(八)なほ(本)
もみぢす(須)れば(者)やてり(梨)ま(万)さる(流)らむ 峰子か(可)く

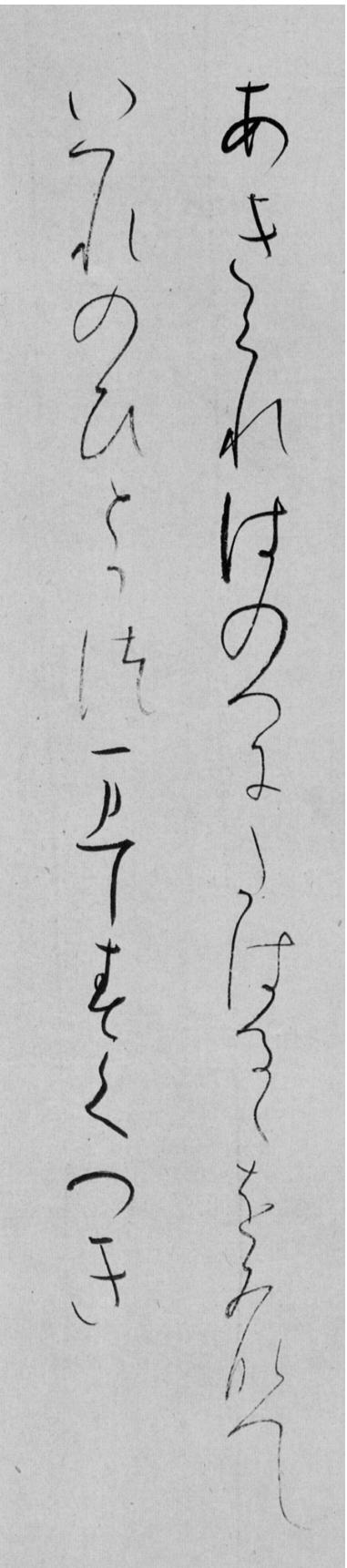
創作



かな規定 秀級以下【十一月十五日締めきり】用紙 半紙タテ $\frac{1}{2}$ （料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全體、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。

高野切 第三種
(掲載写真縮小93%)



よみ方 あきく(久)ればのべに(尔)た(多)はるゝをみな(那)へし
いづれのひとか(可)つ(徒)ま(万)です(春)く(久)べき

かな条幅規定【十一月十五日締めきり】用紙 小画仙紙半切（料紙可）

善養寺紅風選書

習い方解説 (-)

善養寺 紅 風

白雲に羽うちかはし飛ぶ雁の
かずさへ見ゆる秋の夜の月

(古今和歌集)

条幅作品は、漢語を生かして26
～28文字で収めると良いでしょ。

字数が多いと騒がしくなります。

今回は、書き始め白を平仮名にし
たので二行目は対比の意もかねて、
漢字にしました。含墨したら墨の
量に応じて運筆の速さと筆圧を調
節して書いてみましょ。

よみ方 しら雲に(耳)羽うち(運)か(可)は(盤)しと(登)ぶ
雁のか(可)ず(春)さ(佐)へ(遍)み(三)ゆ(遊)る秋のよ(能)月

創作

*たて形式に限る

牧 泰濤



残蟬不斷知秋近
雙燕歸來伴晝長
(残蟬不斷えず秋の近きを知り、雙燕歸來して屋を伴うこと長し)

書体=自由

「起承転結」が大切です。起(初め五字)承(墨継ぎ後の三字)転(二行目上二字、思いつきり舞い踊る様に)結(終わり四字)墨継ぎして丁寧に收めます。人生も又然りと思いますが……。

習い方解説 (一)

竹本 龍汀

漢字条幅規定 秀級以下 [十一月十五日締めきり] 用紙 小画仙紙半切

竹本 龍汀選書



自樂平生道
(自から平生の道を楽しむ)

(寒山詩集)

書体=自由

五字句一行書です。平易な行書のみで縦への流れを意識して書いてみました。一字目と四字目の字画の少ない字で墨継ぎができる、二字目に字画の多い字のある課題を選びました。

「樂」は「楽」の旧字体です。作品の山場となる場所なので字画の多い旧字体選びました。墨継ぎ、文字の大小、メリハリ、流れに気を付けて書いてみて下さい。

習い方解説 (一)

三浦鄭街

雲峰山の左闕の石に坐つて
仙境を眺め考えながら鄭道昭
は悟りの境に浸つていた。

種谷扇舟先生の言葉 鄭街書

今月から6回担当します。今回の課題は、師匠の種谷扇舟先生が1983年8月に発表された鄭道昭の「當門石坐題字」の臨書作品。雲峰山の東峰のすぐ南側に位置し、眼下に東側の眺望が広がる。「鄭公之所當門石坐也」の九文字、そこに綴られた熱い想いを取り上げさせていただきました。

この言葉は、鄭道昭が仙人の如くゆつたりとあたりを見渡している様な雰囲気です。

扇舟先生からこの地で頂戴した「鄭街」の雅号、鄭碑の山々は思い出深く特に雲峰山に来ると、故郷に帰つて来た様な気持ちになります。

仙人になった気分で、ゆつたりと書いてください。

※落款を必ず入れる。
(自分の名前を入れること)

用紙=はがきの大きさ、白色のもの、黒インク使用のこと

書体=自由

今月の

ホープ作品
各部総評 No.628

漢字部 師範 井上 洋観
自然で素直な筆法により、のびやかで流麗な線が美しく、品性的高さを感じさせる上質な行草書。

◎漢字部総評 行草書作品は、線の表現で風趣が異ります。色々な種類の筆を用いて、多彩な線情を楽しみましょう。
(萬城評)



かな条幅部 師範 長谷川朝美
緻密に練り上げたものを、一気に表現された力量は見事です。更是墨継ぎを考慮してみては?

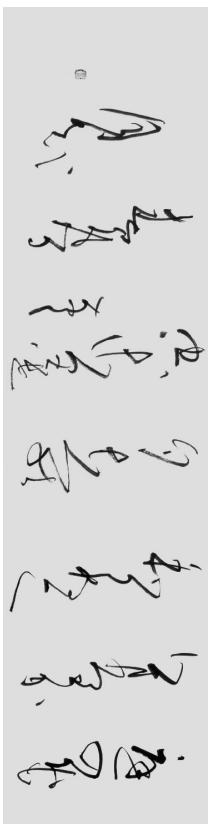
◎かな条幅部総評 誤字少なく無難にまとめた人が多かったが、布置の迷い、行間の計算違い、字粒の過小は散見。要注意。(明子評)



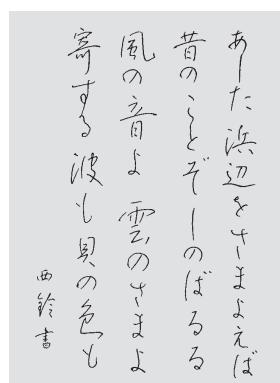
漢字条幅部 師範 熊谷 桃華
歯切れよく、またたっぷりとした線質がリズムを醸し、明快な作である。勢いある運筆が爽快。



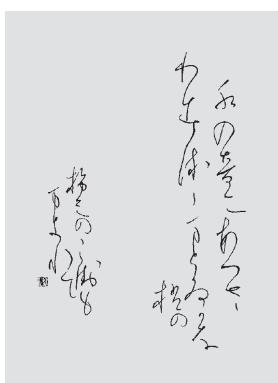
◎漢字条幅部総評 上級やや字数多く三行書きは低調。大小の変化を含め全体構成を工夫したい。下級も同様だが努力作多し。(大雲評)



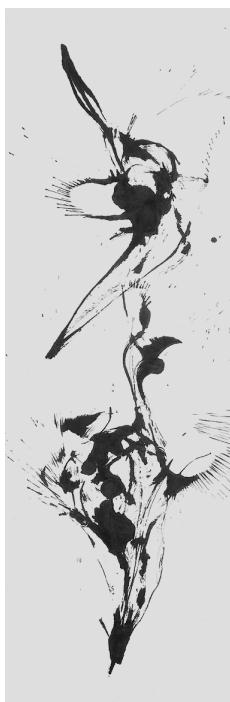
かな部 師範 小野寺久美
先ず、生氣溢れる大らかなりズムに惹かれる。筆の上下動や転折も自然で確か、今後に期待します。
◎かな部総評 水(みづ)梢(こずゑ)声(こゑ)など、かなに置き換える時はかな遣いに十分注意したい。作品良否以前の問題。(洋子評)



ペン字部 師範 小高 西鉛
懐広く、ゆったりした筆致と美しい布置の結果、余白美あり。日頃の古典研究での研鑽の賜物か。
◎ペン字部総評 課題からくる美しさも加味され、格調高い作品が多く喜こばしいこと。引き続き日々の古典研究を望む。(和楓評)



今月の 特別研究部優秀作品（特選）



阿部雅悠書

176×58cm

前衛書（秀惠）阿部雅悠「鼓動」

(秀惠)

阿部雅悠
「鼓動」

鼓動

◆雁塔の特徴をよく捉え、何より暢びやかな筆致が魅力。一貫する気持の安定感がさわやか。（大雲評）
◆ゆったりとした構えで線に生きを与えてくれる。呼吸の乱れなく最後まで同じ動きですばらしい。（倫子評）

◆丁寧、正確な運筆は、表現者の内面を余すことなく伝えて、見る人を豊かにしてくれます。快い線。
(明子評)

◆ やや渴感
要所の潤滑
場を得ては
楽しい作業
をとつて

いるのは墨の濃い所が使われているからか。
（倫子評）

き線が
は少々
か。

響いている。懐のせまさ
気になるがこれもねらい
い。

大 唐 三 藏 圣 教 序 太 宗 文 皇 帝 製 盖 間 二 儀 有 象 顯 霽 載 以
含 生 四 時 無 形 潛 寒 暑 以 化 物 是 以 窵 天 鑒 地 肅 惠 皆 識 其
端 明 陰 洞 陽 賢 括 平 窮 其 數 然 而 天 地 苞 乎 陰 陽 而 易 識 者
以 其 有 象 也 陰 陽 要 乎 天 地 而 難 窮 者 以 其 無 形 也 故 知 象
顯 可 徵 雖 愚 不 惑 形 潛 莫 靈 在 智 猶 迷 況 乎 佛 道 荒 虛 乘 幽
控 痢 弘 濟 萬 品 典 腳 十 方 舉 威 靈 而 無 上 抑 神 力 而

佐藤桂香臨

176×569

172×56c

臨書
(英峰) 佐藤桂香 「雁塔聖教序」

現代詩文書
（八戸）市川紫泉 「儀万智の歌」

◆動きのある筆使いで流れるようにも又激しさも表現されればらしい。墨色に変化がつくと一段と映える。

- ◆ 立体的な動きを感じさせる構成は魅力です。紙と墨色の調和を研究されると深みが加わるのでは…? (明子評)
- ◆ 大胆な運筆が紙面に躍動感を与え、紙面に大きく展開する。墨色がやや平板。異なる研究工夫を。(大雲評)

臨書（千葉）

平野笛舟 「筋切」

29×164cm

◆安定して、美しく上品な臨書です。集中力の高さには敬服。この上は、臨書に自己表現を期待する。

（明子評）

◆この一枚を書き上げる一定の時間を考慮すると精神的にすごい負担がかかるであろう、成立させ見事！

（倫子評）

◆ベテランの用筆で安定した表現は見事である。墨の置き方も良いが細い線に少し柔かさがほしい気もする。

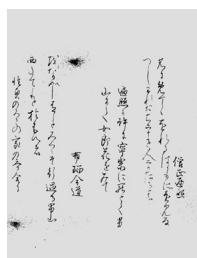
（蒼玄評）

◆自然な流れが安定し、太細の変化がリズムを醸し出している。筋切の強い筆致がもう少しほしい。

（大雲評）



平野笛舟 臨



拡大

現代詩文書（大雲） 小川白舟 「墨」



小川白舟書

◆柔らかな茶淡墨による潤渴の変化が柔軟な線質と調和し、抱擁力ある作となった。ゆとりを感じさせる。

（大雲評）

◆とつと墨を置いていく表現は淡墨ながら重厚さを感じさせる。構成も大らかで雄大な作となつた。

（蒼玄評）

◆肝がすわっている人の思いつきの作品と見ました。表現とはかくあるべしと教えられた。快作。

（明子評）

◆心の底からの呼吸を筆にのせて書かれた作品。詩を口づさんでいるのか、墨色が場所を得て表現見事。

（倫子評）



臨書

（墨縁）

田中扇溪 「雁塔聖教序」

176×60cm

176×56cm

創作の部（36点）

△

漢字——7点

△

かな——1点

△

現代——18点

△

前衛——10点

△

篆刻——0点

△

かな——5点

△

臨書の部（35点）

△

漢字——30点

△

かな——5点

△

前衛——5点

△

現代詩——35点

△

篆刻——5点

△

漢字——35点

△

かな——5点

△

現代詩——35点

△

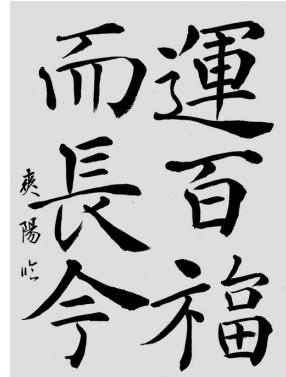
篆刻——5点

△

漢字研究部
(雁塔聖教序)

選評 大野祥雲

今月のホープ作品



朝倉爽陽

筆の開閉を色々と使いこなし、深い線、吊り上げた線、いずれも清よく澄みきっています。また、6字を大らかに臨し、まとめもよく、落ち書きのある作品になりました。落款も見事で書歴を物語っているようです。

◎漢字研究部総評

今回も120数点の作品を見せていただきました。剛毛筆を使用し、鋭い線で紙深く食い込

んだ作。柔毛筆に濃墨を含ませ温かさのある線で書いた作。大きい運筆で懐の広い作。動きが自然で点画の間に緊密な統一があり、字形もよい作。こうした雁塔の結構や性情をくみとった作品が沢山あり、良い学書をされていました。なお、「凝」の「ン」。2画目を書き忘れている方がいました。ご注意を…。



久佳初綾一純代子子江美琴風

阜聰楊彩谷翠月春風雨秀

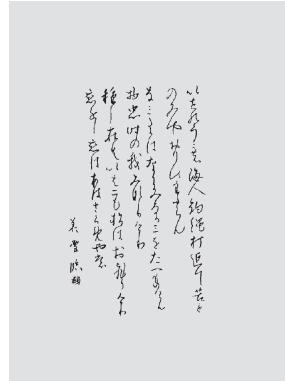
春典景秀理奈雪子峰圃奈

颯香里代和加江月香由美子

か な 研 究 部 (筋切)

選評 勝山初美

今月のホープ作品



本 田 美 雪

かな研究部 特選 本田 美雪

線の強弱・緩急運速による美しいリズム・流動する線は、日頃の修練の賜物で見事です。特徴をよくとらえ卓越した作品となりました。

◎かな研究部総評

全体に誤字が少なく良く書かれていました。初心の方は、筋切の潤渴・濃淡による美を意識し、構成のも配慮して書くと良いでしょう。

かな研究部成績表